

歴史を裏返すこと、表返すこと

今年もまた<5・15>がやってくる。<5・15>は沖縄と沖縄人にとってなんであり、なんであったのか。まずわれわれの「常識」や「通念」を疑ってみること。

1972年5月15日という歴史的なトピックを、メディアの世界では「沖縄が日本に復帰した日」と見なし、教科書にもそう書かれている。だが「復帰」がもとの場所・地位・状態などに戻ることを意味するならば、日本は沖縄にとってけっしてそのような場所や地位や状態だったわけではなかった。

歴史の通念では、沖縄が日本になったのは1879年だったといわれるが、実際は「琉球処分」という名の武力的な併合であった。つまり「なった」のではなく「ならされた」という事実が浮かび上がってくる。だとするならば<1972年5月15日>の「復帰」の意味は根本的に問われなければならない。歴史の常識のなかに封印された、「私にとっての<5・15>とは？」を語るべきである。それぞれの声を歴史の現在に投げ返すべきである。

沖縄はこれまで、日本の国体や国民が膨らんだり縮んだりしながら延命し、存続していくための<境界>装置として都合のいいように利用され、併合と分離を反復させられてきた。戦後は冷戦構造のもと、アメリカのヘゲモニーに従属し、共犯しつつ沖縄を「軍事的植民地」として合作していった。

メア元日本部長の発言に刻み込まれた沖縄イメージは、鏡のように日米の植民地主義的共犯関係を写し出してはいないだろうか。メア発言が露出したもの、封印したもの、露出しつつ封印したものはなんであったのか。

継続する植民地主義と終わらない琉球処分——

2011年という年を歴史化すること。その通時性と共時性の交差するところに沖縄と日本の関係史の要諦が瞬きしないだろうか。1945年の沖縄戦を間に挟み、沖縄の近現代史を裏返してみよう、そして表返してみよう。

仲里効（なかざといさお）

1947年沖縄南大東島生まれ。1995年に雑誌『EDGE』（APO）創刊に加わり、編集長。現在おもに映像批評の分野をうろつく。主な著書に『オキナワ、イメージの縁（エッジ）』（未来社、2007/07年度沖縄タイムス出版文化賞）『フォトネシア—眼の回帰線・沖縄』（未来社、09）。編・共著に『沖縄写真家シリーズ 琉球烈像全9巻』（監修・解説、未来社、10年～）、『複数の沖縄』（人文書院、03）、『沖縄／暴力論』（未来社、08）、『沖縄問題とは何か』（弦書房、08）、『沖縄映画論』（作品社、08）など。その他、03年山形国際ドキュメンタリー映画祭沖縄特集「琉球電影列伝」コーディネーター、07年山形国際ドキュメンタリー映画祭「アジア千波万波」審査員など。